

# Paul Passyの*Le Français Parlé* (1889)における リエゾンについて

近藤野里

## 1. 始めに

今日のフランス語のリエゾンは、古フランス語では発音されていた語末子音が徐々に脱落していったことで形成された現象である。11世紀～12世紀頃から始まった語末子音の脱落の進行とリエゾンの形成は大きく三段階に分けて説明することができる (cf. 近藤, 2015)。第一段階では語末子音が子音の前で発音されなくなる一方で、休止の前では発音される (*un petit garçon* [œ pətɪ ɡaʁsɔ̃], *il est petit* [i le pətɪ])。第二段階では、語末子音の脱落は休止の前においても起きるようになり、母音の前でのみ発音されるようになる (*il est petit* [i le pətɪ], *un petit arbre* [œ pətɪ tʁɛbvʁ]). この時点で、子音が脱落した形 (ex. *petit* [pətɪ]) がその語の基本的な発音として定着する (cf. Morin, 2005)。第三段階では、母音の前において語末子音字が常に発音されるわけではなくなり、語末子音字の発音に関する規則が文法書や覚え書きの中で言及されるようになる。

実際の発話の録音が残っていない時代には出版された文法書の記述は当時の発音の規範を知るために貴重な資料であるが、規範を教えるという目的から、基本的にはどのコンテキストでリエゾンを実現すべきか否かという規則が提示されることが多い。しかし、リエゾンは発話に用いられるスタイルなどに応じてその実現頻度が異なるため、リエゾンの実現頻度について知るには文法書の情報だけでは不十分である。

本研究では、録音技術が発展の途上にあった時代に、音声学者 Paul Passy が発音記号を用いてフランス語の発音を記述した *Le Français Parlé* 第二版 (1889) の分析を行い、19世紀末のフランス語のリエゾンについて調査を行う。Straka (1981: 198) は Bruneau、Littre、Rousselot、Dauzat らの証言を引用しながら、19世紀の王政復古の時代に貴族たちがリエゾンを避ける一方で、学者ぶった

人々や教師たちが懸命にリエゾンをする様子、そして20世紀に入ると今度はリエゾンをあまりしなくなっていくという言語変化について言及している。本研究では19世紀末の発音を研究対象とすることで、この変化が進行する過程における共時的な言語状況について明らかにすることができるだろう。また、Passyによる発音記述を分析する面白さは、19世紀末や20世紀初頭の言語学者がどちらかといえば規範的な発音を記述するのに対して、Passyは実際の発話における発音の多様性を記述することを試みていたところにあるだろう(Durand & Lyche, 2021)<sup>1</sup>。本研究では、まずリエゾンの定義とその分類について説明し、その後Passyの人物像とその著作 *Le Français Parlé* 第二版(1889)の特徴について述べる。*Les sons du Français* (1899)の中に見られるPassyによるリエゾンの説明についても触れたい。終わりに、本研究のコーパスである *Le Français Parlé* 第二版(1889)におけるリエゾンの実現の分析結果を提示する。

## 2. リエゾンの定義とその分類

リエゾンの実現とは、語が単独で発音された場合には、読まれない語末子音が、後続する語が母音で始まる場合にその語頭に音節化されて発音されることである。例えば、*les* [le] と *ours* [urs] の連辞 *les ours* は [le zurs] と発音される。つまり、*les* の語末子音 *s* がリエゾン子音 [z] として後続語の語頭で発音されており、これがリエゾンの実現である。ただし、リエゾンは常に実現されるわけではなく、伝統的にはこれまで義務的リエゾン、選択的リエゾン、禁止的リエゾンという3種類のコンテキストに分類されてきた。

Delattre (1947)によって提示された簡略的な分類を以下に示す<sup>2</sup>。

表1 | Delattre (1947)によるリエゾンコンテキストの分類

	義務的	選択的	禁止的
名詞	限定詞+名詞/形容詞 <i>vos</i> [z] <i>enfants</i> 形容詞+名詞 <i>un ancien</i> [n] <i>ami</i>	名詞(複数形)+ <i>des soldats</i> [z] <i>anglais</i> <i>ses plans</i> [z] <i>ont réussi</i>	名詞(単数形)+ <i>un soldat</i> // <i>anglais</i> <i>son plan</i> // <i>a réussi</i>

1 例えば、19世紀末に同じく発音の記述を出版した Koschwitz (1896) は Passy が規範的なフランス語を記述していないことに対して非常に批判的である。

動詞	代名詞+動詞 <i>ils [z] ont compris</i> 動詞+代名詞 <i>ont [t]-ils compris</i> <i>allons [z] -y</i>	動詞+ <i>je vais [z] essayer</i> <i>j'avais [z] entendu dire</i> <i>vous êtes [z] invité</i> <i>ils commencent [t] à lire</i>	
不変化語	単音節語 <i>en [n] une journée</i> <i>très [z] intéressant</i>	複数音節語 <i>pendant [t] un jour</i> <i>toujours [z] utile</i>	et + <i>et // on l'a fait</i>
凝結表現 および 特殊な場合	<i>comment [t] allez-vous</i> <i>les Etats [z]-Unis</i> <i>tout [t] à coup</i> <i>de temps [z] en temps</i>		+有聲の h <i>des // héros</i> + un, onze, huit <i>la cent // huitième</i>

Delattre (1947) は、この簡略的な分類に加えて、より詳細なりエゾンのコンテキストも提示しているが、ここでは特に動詞のあとのリエゾンに注目したい。Delattre は動詞とその後続語の間のリエゾンを基本的には選択的コンテキストに分類しているが、être 動詞が用いられる « *c'est* + » (*c'est impossible*) と非人称の « *il est* + » (*il est évident*) については義務的リエゾンに分類している。ただし、フランス語話し言葉コーパスを用いた最近の研究は、être 動詞の三人称単数形 *est* とその後続語のリエゾンの実現は変動的であることを示している<sup>3</sup>。

最近の話し言葉コーパスの研究からリエゾンに関して明らかになったことは、実際の発話においてリエゾンが絶対的に実現されるコンテキストはそれほど多くないということである。Durand & Lyche (2008)<sup>4</sup> は PFC コーパスの調査から、絶対的にリエゾンが実現されるのは、(1)「限定詞+名詞」(*un [n] ami*)、(2)「後接語+動詞」(*vous [z] avez...*)、(3)「動詞+前接語」(*comment dit-[t] on*)、(4) 複合語や成句 (*pot-[t] au-feu*) の4つのコンテキストに限定されることを明らかにした。Durand & Lyche (2008) に従えば、Delattre (1947) の

2 Delattre (1947) の分類は、教育的な意図で作成され、どちらかといえば規範的な分類と言える (cf. 近藤, 2020)。

3 PFC (Phonologie du Français Contemporain) コーパスに基づいた Mallet (2008: 283-284) の研究では、*est* のリエゾン実現率は43.87%である。

4 Durand & Lyche (2008) は、伝統的なリエゾンの分類と実際の言語使用の間に、違いがあることから、「義務的」、「選択的」、「禁止的」という規範的な分類名ではなく、3つのリエゾンコンテキストを「絶対的 (categorical)」、「変動的 (variable)」、「事実上不在のリエゾン (virtually absent)」と呼んでいる。

分類では、義務的リエゾンに分類される「単音節の前置詞+」、「単音節の副詞+」、「形容詞+名詞」のコンテキストにおけるリエゾンは、常にリエゾンが実現されるわけではない。PFC コーパスに基づいた Mallet (2008) の研究結果からは、単音節の前置詞は特定の語<sup>5</sup>においてリエゾンが安定的に実現されるが、単音節の副詞<sup>6</sup>については語によってリエゾンの実現率が異なることが読み取れる。

### 3. Paul Passyと*Le Français Parlé*第二版(1889)

本節ではまず Passy の人物像について簡単に説明した後、本研究のコーパスである *Le Français Parlé* 第二版 (1889) の特徴について説明する。

#### 3.1. Paul Passyについて

フランスの音声学者 Paul Passy (1859-1940) は国際音声学会の創始者として知られている。ノーベル平和賞を受賞した Frédéric Passy を父に持ち、学識のある家庭に生まれた Passy は幼少期からポリグロットとして育ち、高等研究実習院 (École pratique des hautes études) を修了後、英語とドイツ語の教師となった。言語教育に使用するために独自の音声記号を作り、音声学は独学で学んだと言われている。1894年から1926年まで高等研究実習院で教鞭を取り、パリ郊外にある Bourg-la-Reine の自宅でも私的に音声学を教え、イギリス人の音声学者 Daniel Jones も教え子の一人であった (Galazzi, 1992; Collins & Mees, 1999)。

Passy が語学教師として働いていた当時の外国語学習の内容は文法学習と翻訳練習が中心であり、外国語を話すための口頭能力を身につけさせるのが難しいというのは、フランスに限らずヨーロッパ全体が共有する問題であった。19世紀後半はこのような状況を打破する動きが活発化した時期でもある (cf. Durand & Lyche, 2020)。Passy も出席したストックホルムで開かれた1886年の文献学会議では、外国語学習の中心的活動であった翻訳練習を減らし、話すこと

5 以下のようなリエゾン実現率を Mallet (2008) は観察している。chez (83.33%), dans (94.97%), sans (96.77%), sous (100%), vers (0%)

6 Mallet (2008) が観察した単音節の副詞のリエゾン実現率は以下の通りである。bien (42.7%), pas (1.36%), plus (64.11%), tout (82.9%), très (96.55%)

を中心に据えた言語教育の方法が声高に唱えられた。既にそのような教育を目指していた Passy がこの考えに賛同したのは自明のことであった。Passy 自身は、音声学を言語教育に取り入れることに尽力し、その後も言語教育の方法を改革していくことになる。

Passy が中心となり、1886年には「英語教師たちの音声学協会 (Association phonétique des professeurs d'anglais)」が発足され、3年後の1889年に協会の名前が「現代語の教師の音声学協会 (Association phonétique des professeurs de langues vivantes)」に変更される。そして、1897年にこの協会は国際音声学会 (Association Phonétique Internationale) となった (Galazzi, 1992)。Passy の著作はフランス語の発音教育に関するものが多く、その代表的なものが *Les sons du français* (以下、*Les sons* と呼ぶ) である。*Les sons* には、フランス語の発音に関する基本的な説明が書かれている。1887年に初版が出版されて以来、*Les sons* は重版・改訂が繰り返され、1932年には最終版である第十二版が出版されている。初版から第七版までは Passy の試みでもある簡易化された綴り字 (orthographe reformée) で書かれている (Durand & Lyche, 2021: 4)。そのため、後述する第五版でも特殊な綴り字が用いられている。

### 3.2. *Le Français Parlé* 第二版 (1889) の特徴

ここでは、本研究のコーパスである *Le Français Parlé* の第二版 (1889) について紹介したい。*Le Français Parlé* の初版は1886年に出版され、修正を経た後に1889年に第二版が出版された。この文献は、3ページの前書きと2ページの発音記号の説明、そして120ページの発音記述で構成されている。発音記述の部分に含まれる語数は13733語である。*Le Français Parlé* はその初版から、左側のページに文章が、右側のページにはそれに対応する発音が発音記号によって記述されている。

## Le Français en Amérique.

Je tournai la tête vers le jour: horreur! Mes  
cheveux se hérissèrent, je n'eus même pas la force  
de crier.

左側のページ

lə frãʒɛ ʔn amerik.

ʒə turne la te:t ver lə ʒu:r\ : ʔrœ:rɪ me fʋð  
 sə herise:r / ʒ n y me:m pʌ la fɔrs' də kriε.

右側のページ

図1 | *Le Français Parlé* (1889: 30)の左右ページの抜粋

言語学的研究を行うために質・量ともに十分な録音が残っていない当時の状況を考慮すれば、Passyによるフランス語の発音の記述は、19世紀末のフランス語の発音を知るために非常に貴重な資料である。記述されたフランス語はPassyが日常的に耳にしたものであり、また彼自身が話すフランス語に対する内省が反映されている (Passy, 1889: iv-v)。Passyがその記述の対象としたフランス語は、少なくとも北フランスで話されるフランス語 (la prononciation usuelle des Français du Nord) であるが、Passy自身の発音がモデルとなっているという断わりが、第二版の序文に見られる。

Passyは異なるスタイルによる発音特徴の違いを記述することも心掛けており、*Le Français Parlé*には戯曲、物語、演説、韻文など合わせて20の作品と発音記号による記述が収録されている。

表2 | *Le Français Parlé* (1889)に収録される20作品 (Kondo, 2018)

N°	タイトル	作者	ジャンル	ページ
1	Une surprise (Le voyage de Monsieur Perrichon)	Labiche	戯曲	p. 2-10
2	La chasse à Tarascon (Aventures de Tartarin)	Daudet	物語	p. 10-16
3	L'enlèvement de la redoute	Mérimée	物語	p. 16-29
4	Le Français en Amérique (Paris en Amérique)	Laboulaye	物語	p. 30-38
5	L'orgueil guéri	Voltaire	物語	p. 38-42
6	La maison qui marche	Saint-Simon	物語	p. 42-47
7	La culture classique (la Question du Latin)	Frary	論説	p. 48-54
8	La fête de la fédération (Histoire de la Révolution)	Thiers	論説	p. 54-64
9	Le désespoir du lépreux (le lépreux de la cité d'Aoste)	Xavier de Maistre	論説	p. 64-72
10	Les parlars français (discours prononcé au Congrès des Sociétés Savantes le 26 Mai 1888)	Gaston Paris	演説	p. 72-86

11	Péroration	Frédéric Passy	演説	p. 86-94
12	Discours de Mirabeau sur la mort de Franklin	Mirabeau	演説	p. 94-97
13	Le colimaçon	Arnaud	韻文	p. 98
14	Les étoiles qui filent	Béranger	韻文	p. 98-102
15	La foi	Lamartine	韻文	p. 102-104
16	Rappelle-toi	Musset	韻文	p. 104-106
17	La fraternité	Sully Prudhomme	韻文	p. 106
18	Chanson	Hugo	韻文	p. 108
19	Les Djinns	Hugo	韻文	p. 108-118
20	Avril	Coppée	韻文	p. 118-121

Passy はこれらの作品の発音記述におけるスタイルの違いについて、以下のよう  
に説明している。

« Je me suis appliqué à graduer la prononciation parallèlement au style, donnant dans les deux premiers morceaux, le langage familier de la conversation, avec ses élisions, ses contractions et ses assimilations nombreuses ; plus loin une prononciation de plus en plus soignée, devenant tout à fait littéraire dans les morceaux oratoires ou poétiques de la fin du volume. » (Passy, 1889: iv)

「スタイルに合わせて発音を変えることを心がけた。最初の2つの作品には、多くのエリジョン、縮約、中和によって会話で用いられるくだけた話し方を反映した。そして、巻末に近づくにつれ、よりかしこまった発音を記述し、本書の後半の演説や詩的な作品には文学的な発音を記述した。」  
(筆者訳)

しかし、この説明では、作品ごとのスタイルの区別は明白ではない。本の後半に配置された作品は、演説や詩であることは明白である。しかし、前半の作品では、そのような区別が明白であるとは言い難い。Passy 自身は、最初の2つの作品はくだけた言葉づかい (langage familier de la conversation) で記述したと述べている。Labiche の戯曲 *Le voyage de Monsieur Perrichon* からの抜粋「1. Une surprise」では会話文が主であるが、続く Daudet 作 *Aventures de*

*Tartarin* からの抜粋「2. La chasse à Tarascon」はその通りではない。これらの2作品とそれに続く作品にも無声化や脱落など規範的ではないフランス語の音声特徴の記述が観察される。同文献を研究対象とした Kondo (2018) は、これらの20作品の間で用いられるスタイルがどのように異なるのかを判断するために、*de* や *je* の無声化と流音の脱落頻度を算出した上で20作品のスタイルを4つに分類している。Kondo (2018) は作品番号1～6までを親しい間柄での会話、7～9を標準的なスタイル、10～12を演説スタイル、13～20を詩の朗読に分類している。本研究もスタイルの違いに着目する場合にはこの分類に則ることにする。

Passy の用いた発音記号は、12個の母音 ([i, y, u, e, ø, o, ε, œ, ɔ, a, ʌ, ə])、4つの鼻母音 ([œ̃, ɔ̃, ē, ā])、18個の子音 ([p, b, t, d, k, g, m, n, N, l, r, f, v, s, z, ʃ, ʒ, h])、3つの半母音 ([w, ɥ, j]) である。補助記号として、母音の長さを表す記号「:」、アクセントを表す記号「'」、イントネーションの上昇を表す記号「/」、下降を表す記号「\」、上昇が後続する下降「V」、下降が後続する上昇「^」といった補助記号も使用されている (近藤, 2013)。この発音記号の中には、今日の国際音声記号でフランス語の音を表す記号とは異なるものいくつか散見されるが (近藤, 2013)、本研究では、Passy が記述に用いた発音記号ではなく、今日の国際音声記号を用いることにする。

#### 4. Passyによるリエゾンの説明——*Les sons du français*第五版(1899)より

*Le Français Parlé* (1889) におけるリエゾンの分析を行う上で、本節では Passy がどのような説明をリエゾンに与えていたのかを具体的に見ていく。本研究では、入手することができた1899年に出版された *Les sons* 第五版でのリエゾンの説明を参照する。

Passy はリエゾンの実現が発話スタイルによって異なることを指摘しており、またリエゾンを過剰使用する話者について言及している。

« L'emploi des liaisons varie considérablement selon le stîle et selon les personnes. Dans le langage littéraire on lie beaucoup plus que dans le stîle familier ; mais ce sont surtout les instituteurs, et encor plus les personnes peu instruites

essayant de ‘parler bien’, qui introduisent des liaisons en masse. Parfois alors èles se trompent et emploient mal à propos (z) ou (r) come son de liaison [*des cuirs, des velours*]<sup>7</sup>]. » (Passy, 1899: 127-128)

「リエゾンの実現はスタイルや話し手によって著しく異なる。文学的な話し方では、親しい間柄のスタイルよりもリエゾンが起きる。しかし、教師や、「正しく話す」ことを試みる学識がそれほどない人々は、リエゾンをさらに頻繁に会話に取り入れようとする。彼らは時に間違えた発音をしてしまい、リエゾンの音である z もしくは r を奇妙に発音する。」(筆者訳)

Passy (1899: 128) は、話し言葉 (la langue parlée) において、意味的に結束性が高い2つの語でのみリエゾンが実現すると説明しており、そのようなコンテキストとして以下を挙げている。

- (a) 冠詞 + 形容詞、冠詞 + 名詞 : *les homes* (hommes)<sup>8</sup> [lezɔm], *les autres personnes* (personnes) [lezotrɛ̃sɔ̃n]<sup>9</sup>
- (b) 形容詞 + 名詞 : *le grand ours* [lɑ̃ɡvɑ̃tuʁs], *deux (deux) petits enfants* [døptizɑ̃:fɑ̃], *mon ami* [mɔ̃nami]
- (c) 数詞 + 形容詞、数詞 + 名詞 : *deux (deux) animaux* (animaux) [dø:zanimo]
- (d) 副詞 + 形容詞、副詞 + 副詞 : *très utile* [tʁɛzytil], *trop idiot* [tʁɔpidjo]
- (e) 人称代名詞 + 動詞、人称代名詞 + 中性代名詞 (en, y) : *il entent* (entend) [ilɑ̃:tɑ̃] (*vs. il voit* [ivwa]), *nous arrivons* [nuzaʁivɔ̃], *on écoute* [ɔ̃nekut], *j’en ai* [ʒɑ̃ne], *vous en avez* [vuzɑ̃nave], *nous y venons* [nuzivɔ̃n], *en y pensant* [ɑ̃nipɑ̃:sɑ̃]
- (f) 動詞 + 人称代名詞、動詞 + 中性代名詞 (en, y) : *at il* (a-t-il) *peur* [atipœ:v], *vas y* [vazi], *prens-en* (*prends-en*) [pʁɑ̃zɑ̃]
- (g) 前置詞 + 補語 : *sans abri* [sɑ̃zabʁi], *en écoutant* [ɑ̃nekutɑ̃]

7 Mallet (2008: 94) によれば、*cuir* は本来 [tʁ] が発音されるにもかかわらず、代わりに [z] のリエゾン子音を発音される間違いである (*tu n’étais point-/z-/ici*)。 *velours* はリエゾンのコンテキストではないにもかかわらず、子音 [z] が発音されることを意味する (*va-/z-/à-lui*)。

8 *Les sons* 第五版では、通常の綴り字とは異なる綴りが使われているため、括弧の中に通常の綴り字を示す。

9 この発音形では *autres* の語末の [ʁ] が脱落している。

- (h) 接続詞 *quand* とその後続語 : *quand il viendra* [kātivjɛ:dʁa]  
 (i) *être* と *avoir* の多様な形態、特に助動詞とその後続語 : *il est ici* [iletisi], *il était arrivé* [iletɛtavɛ:ve], *ils ont appris* (appris) [izɔtapʁsi]  
 (j) 複合語 : *mot-à-mot* [mɔtamɔ], *pot-au-feu* [pɔtofø], *piéd à terre* [pjɛtatɛ:r], *de temps en temps* [dɛtãzãtã]

以上の (e) の例から、人称代名詞 *il* に母音で始まる語が後続した場合 (*il entend*) に、[l] が発音されることがリエゾンとして扱われていることがわかる。また、*il* に続く語が子音で始まる場合や (*il voit*)、*il* と動詞が後続された場合 (*a-t-il peur ?*) についても、[l] が発音されない。Kondo (2018) でも指摘されていることではあるが、演説や詩の朗読のようなかしまった発話状況でない限りには、当時の *il* の発音は子音と休止の前では [j] と発音され、母音の前でのみ [il] と発音されていた。そのため、Passy は母音の前の *il* の [l] の発音をリエゾン子音として扱っている。

(i) については、20世紀半ばの Delattre (1947) のリエゾンの分類と異なる点が見られる。三人称単数形 *est* だけではなく、*être* 動詞の活用形はリエゾンが安定的に実現されるコンテキストであると解釈できる。また、Delattre (1947) が義務的リエゾンに分類していない *avoir* 動詞については、安定的にリエゾンが実現されるというような解釈も可能だが、例文として三人称複数形 *ont* が挙げられるのみである。

(d) 「副詞+」、(g) 「前置詞+」というコンテキストについて、Passy は単音節の副詞 (*très, trop*) と前置詞 (*sans, en*) の例を挙げただけで、複数音節の副詞・前置詞のリエゾンの実現については特に説明がない。また、*être* 動詞と *avoir* 動詞以外の動詞のあとのリエゾンや、「名詞(複数形)+形容詞」というコンテキストについても特に例が挙げられていない。このようなリエゾンコンテキストでどれほどリエゾンが実現されるのかという疑問が残る。

Passy は数詞についてのみ、*les onze* や *les trois huit* のような例ではリエゾンが実現されないことを補足しているものの (Passy, 1899: 129)、特に他の禁止的リエゾンや選択的リエゾンのコンテキストについて説明していない。

## 5. 分析

本研究では、*Le Français Parlé*の第二版(1889)をWordファイル上に電子化したものをコーパスとして使用する。左側のページにある文章と右側のページに記述された発音を照らし合わせながら、リエゾンのコンテキストを目視で探す作業を行った。その際に、リエゾンが実現されているか否か、どのリエゾン子音が表れるかを確認することで、リエゾンのコード化を行った<sup>10</sup>。そして、リエゾンのコード、リエゾンコンテキストにある左側の語と右側の語、それぞれの品詞などを記録するメタデータをExcelファイル上に作成し、コーパスの分析に用いた。本研究では、左側の語に語末子音字があり、右側の語が母音で始まっている場合をリエゾンのコンテキストとし、コーパスから1185のリエゾンコンテキストを抽出した。

*Les sons* 第五版においてリエゾンが実現されるコンテキストとして提示されていた「冠詞+形容詞/名詞」、「形容詞+名詞」、「数詞+形容詞/名詞」、「人称代名詞+動詞/中性代名詞」、「動詞+人称代名詞/中性代名詞」、「*quand*+」のコンテキストについては、本コーパスでもリエゾンが安定的に実現されることが観察された。ただし、本コーパスにおいて「副詞+形容詞/副詞」、「前置詞+補語」、「動詞 *être, avoir* +」のコンテキストではリエゾンが必ずしも安定的に実現されているわけではないため、これらのコンテキストにおけるリエゾンについて観察する。

また、上記のコンテキストに加えて、*Les sons* 第五版では言及されなかった「名詞(複数形)+形容詞」、「その他の動詞(*être, avoir* 以外)+」のコンテキストについてリエゾンがどのように実現されているのかについても確認する。特にその他の動詞については、スタイルの違いによるリエゾン実現率の変動や、動詞の活用形の音節数およびリエゾン子音の種類の違いについても注視する。また、不定詞のあとの [v] の発音とリエゾン子音の無声化についても扱う。

---

10 コード化については、Durand, J. & Lyche, C. (2003). Le projet 'Phonologie du Français Contemporain' (PFC) et sa méthodologie, In : Delais-Roussarie & Durand (eds.) *Corpus et variation en phonologie du français : méthode et analyses*. Toulouse : Presses Universitaires du Mirail, pp. 212-276で提案されている PFC (Phonologie du Français Contemporain) コーパスでのリエゾン分析に用いられるものを使用した。

### 5.1. 「副詞+形容詞/副詞」

副詞のあとのリエゾンコンテキストには、「副詞+形容詞」、「副詞+副詞」がある。表3にあるとおり、コーパスでは41のコンテキストのうち28例でリエゾンの実現が観察され、リエゾン実現頻度は68.29%であった。単音節の副詞と複数音節の副詞では、リエゾンの実現率に違いが見られ、単音節では85.19%、複数音節では35.71%である。単音節の副詞とその後続語ではリエゾンの実現が観察されたのは、*bien, plus, mieux, moins, tout* であり、リエゾンの実現が観察されない副詞については *tôt, pas, loin* が挙げられる。複数音節の副詞については、リエゾンの実現は *souvent, parfois, inviolablement, passablement, autrement* のあとで観察された一方、*toujours, jamais, bientôt, diablement, froidement, généralement, absolument, longtemps* のあとではリエゾンの実現は観察されなかった。

表3 「副詞+形容詞/副詞」のリエゾン実現頻度

	副詞+形容詞/副詞	副詞(単音節)+	副詞(複数音節)+
リエゾン実現頻度	68.29% (28/41)	85.19% (23/27)	35.71% (5/14)

### 5.2. 「前置詞+補語」

「前置詞+補語」のコンテキストでは、48例中の46例でリエゾンの実現が観察され、96.3%の実現率である。また、単音節の前置詞については、*en, chez, dans, sans* の4つの前置詞が観察され、リエゾンは常に実現されている。一方で、複数音節の前置詞ではリエゾンは6例中の4例で実現され、その4例は全て「*après avoir*」という連辞であった。リエゾンが実現されなかった2例は *pendant* (2例) とその補語である。

表4 「前置詞+補語」のリエゾン実現頻度

	前置詞+補語	前置詞(単音節)+	前置詞(複数音節)+
リエゾン実現頻度	96.30% (46/48)	100% (42/42)	66.67% (4/6)

- (1) « Les fédérés, **après avoir** assisté aux imposantes [...] » (8. La fête de la fédération, p. 62)

[le fedevɛ, apʁɛz avwa:v asiste oz ɛpozɑ:t]

(2) « Pendant un instant [...] » (3. L'enlèvement de la redoute, p. 16)

[pána<sup>11</sup> ɛn ɛstɛ]

### 5.3.「名詞(複数形)+形容詞」

「名詞(複数形)+形容詞」のコンテキストでは、23のコンテキストのうち2例のみでリエゾンが実現され、その頻度は8.7%と低い値である。また、リエゾンが実現したのは、1例は演説「11. Péroration」、そして、もう1例は韻文「15. La foi」においてである。「名詞(複数形)+形容詞」のコンテキストにおけるリエゾンは、綴り字の視覚的情報が影響し、朗読のような文字を見て話すレジスターにおいて実現されやすいと解釈できるだろう。以下にリエゾンが実現された2例を挙げる。

(3) « au lieu de faire bénir le nom des **peuples avancés** et de justifier par ses œuvres [...] » (11. Péroration, p. 94)

[oljɔ d fɛv beni:v la nɔ' de pœplɔz avɑsɛ d dʒystifje pʁɛz sez œ:vʁə]

(4) « Parcourir au hasard les **cieux épouvantés** ; » (15. La foi, p. 102)

[pʁɔkvi:r o haza:v' le sjɔz' epuvɑtɛ ;]

### 5.4.動詞のリエゾン

動詞のリエゾンについては、絶対的にリエゾンが実現される倒置文(ex. *chantait-il*)を除いたコンテキストについて観察を行う。コーパスでは、être 動詞と avoir 動詞のリエゾン実現頻度は非常に高い一方、その他の動詞のリエゾン実現頻度はそれほど高くないことが観察された。今日のフランス語と比較すると、être 動詞と avoir 動詞のリエゾンの実現率が高いことが特徴的であり<sup>12</sup>、その他の動詞についてもリエゾンの実現率は非常に高いと言える。

11 *pendant* の発音がここでは [d] が鼻母音化され、[n] となっている。

12 PFC コーパスに基づいた Mallet (2008: 282-285) の研究では、être 動詞のリエゾンの実現率は27.22%であり、avoir 動詞はさらに低く3.45%である。

表5 | 動詞の種類によるリエゾンの実現率の違い

	être 動詞	avoir 動詞	その他の動詞
リエゾン実現頻度	93.55% (65/69)	90.32% (28/31)	48.99% (73/149)

être 動詞とその後続語においてリエゾンの実現が観察されなかったのは、4例のみ (*furent* (1例), *étais* (3例)) であった。avoir 動詞については、リエゾンの実現が観察されない動詞の活用形は *eussent*, *avez*, *avais* の3例であった。以下に例を示す。

- (5) « Si Athènes, Rome et Sparte **furent à la mode** [...] » (7. La culture classique, p. 48)  
[si atɛ:n, ʁɔm' e spaʁt' fy:ʁ a la mod]
- (6) « **J'étais en** Amérique » (4. Le Français en Amérique, p. 30)  
[ʒ etɛ ɑ̃ amɛʁik]
- (7) « Vous **avez un** défaut mortel ! » (1. Une surprise, p. 2)  
[vuz ave œ defo ʁ mɔʁ'tɛl!]
- (8) « Ce que **j'avais entendu** [...] » (3. L'enlèvement de la redoute, p. 18)  
[skə ʒ ave ɑ̃tɑ̃dy]
- (9) « quelqu'avantage qu'ils lui **eussent offert** » (6. La maison qui marche, p. 42)  
[kɛlk avɑ̃ta:ʒ ki li ɑ̃ ys' œfɛ:ʁ]

その他の動詞について、以下ではスタイルの違いによってリエゾンの実現頻度がどのように異なるのか、またそれぞれの動詞の活用形が持つ音節数の違い (ex. 単音節と複数音節) やリエゾン子音の違い ([t] と [z]) によってリエゾンの実現頻度がどのように異なるのかについて観察する。

表6 | その他の動詞のリエゾンの実現頻度

	親しい間柄での会話	標準的なスタイル	演説スタイル	詩の朗読
リエゾン実現頻度	30.30% (20/66)	73.68% (28/38)	48.48% (16/33)	75% (9/12)
単音節の動詞のリエゾン実現頻度	57.69% (15/26)	62.5% (5/8)	40% (6/15)	75% (3/4)

複数音節の動詞のリエゾン実現頻度	12.5% (5/40)	76.5% (23/30)	55.56% (10/18)	75% (6/8)
リエゾン子音 [t] を持つ動詞のリエゾン実現頻度	36.54% (19/52)	74.29% (26/35)	57.14% (12/21)	66.67% (6/9)
リエゾン子音 [z] を持つ動詞のリエゾン実現頻度	7.14% (1/14)	66.67% (2/3)	33.33% (4/12)	100% (3/3)

表6から、リエゾンの実現率が最も低いのは「親しい間柄の会話」というスタイルであり、リエゾン実現頻度は30.30%とそれほど高くはないことが読み取れる。また、興味深いのは、リエゾンの実現率が最も高いのは「標準的なスタイル」(73.68%)であり、「演説スタイル」(48.48%)よりも高いという結果が得られたことである。「演説スタイル」でのリエゾンの実現頻度が「標準的なスタイル」よりも高くなることが予想されるものの、本コーパスで得られた結果は、その通りではない。興味深い結果であるものの、解釈が非常に難しい。

動詞の活用形が持つ音節数の違いやリエゾン子音の違いを軸にリエゾンの実現頻度を比較してみると、特に「親しい間柄での会話」において頻度の違いが観察される。動詞が単音節(57.69%)の場合と複数音節(12.5%)の場合、そしてリエゾン子音 [t] を持つ場合(36.54%)と [z] を持つ場合(7.14%)に実現頻度の違いが観察されたと言える。このような結果から、少なくとも親しい間柄での会話では、複数音節の動詞の活用形の後やリエゾン子音 [z] を持つ動詞の後で、リエゾンが実現されない傾向があったと解釈できる。

本コーパスから得られた結果に部分的に類似するような点が、音声学者 Rousselot & Laclotte (1902) によって指摘されている。Rousselot & Laclotte (1902) は、子供たちが以前は義務的であったリエゾンを実現しなくなっていることに言及し、そのようなコンテキストとして « *je tien(s) un coupe-papier, j'aimai(s) à faire la couture, nou-s-avon(s) eu, tu a(s) eu, nou-s-avon(s) un piano, vous-ave(z) une table*<sup>13</sup> » (Straka, 1981: 193) を挙げている。例として挙げられているのは、avoir 動詞を含むものが多いが、基本的にはリエゾン子音 [z] を持つ動詞の活用形であり、少なくとも [z] のリエゾンが20世紀初頭に実現されなくなっ

13 Straka (1981) は以下の文献を参照している。Abbé Rousselot & Laclotte, Fauste. (1902). *Précis de prononciation française*, Paris : Didier.

ていく様子が読み取れる。Rousselot & Laclotte (1902) は子供たちの発音におけるリエゾンの減少について指摘しているが、実際には子供だけではなく、大人の話者もそのような発音をする傾向があったと言えるのではないだろうか。

### 5.5. その他

Labiche の戯曲 *Le voyage de Monsieur Perrichon* からの抜粋「1. Une surprise」では、第一群規則動詞 (er 動詞) の不定形の後で [ʁ] のリエゾンが起きる例が 2 例観察された。

(10) « je suis heureux de vous **trouver ensemble** [...] » (1. Une surprise, p. 8)

[ʒə sɥiz əʁø\ də vu tʁuvɛʁ əsɑːblə]

(11) « [...] je ne cherche pas à **m'acquitter envers** vous [...] » (1. Une surprise p. 10)

[ʒə nʃɛʁʃə pɑz' a m akiteʁ əvɛːʁ vu\]

他の作品で全く観察されなかったこの [ʁ] のリエゾンは、会話では非常に珍しいと言える。この 2 例は、作品の登場人物 Perrichon 氏の過剰修正を表したものであると考えられるため、Passy が *Les sons* 第五版で説明していた学識ぶる話者の過剰なリエゾン実現とも解釈できるだろう。

また、発音が期待される子音 [z] ではなく、無声化した [s] の発音が記述されている例が 5 例観察された。これらの例のほとんどが「形容詞 (複数形) + 名詞」という安定的にリエゾンが実現されるコンテキストである。

(12) « [...] **quelques anchois** [...] » (2. La chasse à Tarascon, p. 14)

[kɛks əʃwa]

(13) « [...] et **d'autres ornements** de mauvais goût [...] » (4. Le Français en Amérique, p. 34)

[e d oːts œnəmɑ\ d mɔvɛ gu]

(14) « [...] il cherche **d'autres objets** pour découvrir si c'est la faute [...] » (6. La maison qui marche, p. 44)

[i ʃɛʁʃ d oːts ɔbzɛ puʁ dekuvriːʁ si s ɛ la foːt]

(15) « [...] ils reçurent de **touchantes expressions** d'amour, [...] » (8. La fête de la

fédération, p. 62)

[i ʁsy:ʁ, də tuʃá:ts ɛksprɛsjɔ̃ d amu:ʁ,]

(16) « **Faites attention** qu'il n'en diffère guère plus [...] » (10. Les parlers français, p. 84)

[fɛts atúsjɔ̃ k il n ǎ difɛ:ʁ ge:ʁ plys]

## 6. 結論

本研究では19世紀末のフランス語におけるリエゾンの実現がどのようなものかを、Passyの発音記述の分析を行うことで明らかにした。「副詞+」、「形容詞+」のコンテキストについては、特に単音節の副詞と前置詞ではリエゾンの実現頻度が高い一方で、複数音節の副詞および前置詞ではリエゾンの実現頻度は低くなることが確認された。また、「名詞(複数形)+形容詞」のコンテキストでは、リエゾンの実現は非常に珍しく、綴り字の視覚的情報が発音に影響を与える朗読のようなレジスターに特有なリエゾンであると言える。動詞のあとのリエゾンについては、être 動詞と avoir 動詞でリエゾンが義務的に近い頻度で実現されること、またそれ以外の動詞でもリエゾンの実現頻度が比較的高いことが確認された。

être 動詞と avoir 動詞以外の動詞のリエゾンについては、親しい間柄での会話というスタイルにおいて最もリエゾンの実現率が低いことが確認された。また、動詞の音節数やリエゾン子音の違いを軸にリエゾン実現頻度を比較すると、特に親しい間柄での会話において、複数音節の動詞の活用形やリエゾン子音 [z] を持つ動詞において、リエゾンの実現頻度が低くなる傾向が見られた。特にリエゾン子音 [z] を持つ動詞のリエゾンの実現頻度の低さについては、20世紀初頭の Rousselot & Laclotte (1902) によってすでに指摘された傾向が本コーパスでも観察されたと言える。

本研究は Passy の発音記述の分析から19世紀末のリエゾンの実現の状況について考察したが、リエゾンの実現が減少していくという通時の変化をより具体的に捉える場合には、前後の時代のフランス語の発音について観察可能な文献の調査を行う必要がある。これについては、今後の研究の課題としたい。

[参考文献]

- Collins, B. & Mees, I. M. (1999). *The Real Professor Higgins: The Life and Career of Daniel Jones*, Berlin : Mouton de Gruyter.
- Delattre, P. (1947). Liaison en français, tendances et classification. *The French Review*, 22, 2, 148–157.
- Durand, J. & Lyche, C. (2008). French Liaison in the Light of Corpus Data. *Journal of French Language Studies*, 18, 1, 33–66.
- Durand, J. & Lyche, C. (2020). La méthode directe et Paul Passy : retour sur un parcours. *Le langage et l'homme*, 2020-2, 43–59.
- Durand, J. & Lyche, C. (2021). Retour sur *Les sons du français* : la modernité de Passy. *Journal of French Language Studies*, 1–20.
- Galazzi, E. (1992). 1880–1914. Le combat des jeunes phonéticiens : Paul Passy. *Cahiers Ferdinand de Saussure*, 46, 115–129.
- Kondo, N. (2018). La prononciation des pronoms *il* et *ils* de la fin du XIX<sup>e</sup> siècle — Analyse basée sur *Le Français Parlé* de Paul Passy. *SHS Web Conf*, 46. 6<sup>ème</sup> Congrès Mondial de Linguistique Française. ([https://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2018/07/shsconf\\_cmlf2018\\_03003.pdf](https://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2018/07/shsconf_cmlf2018_03003.pdf)) (最終アクセス日 : 2021年9月30日)
- Koschwitz (1896). *Les parlers parisiens*, 2<sup>ème</sup> édition, Paris : H. Welter.
- Mallet, G. (2008). *La liaison en français : descriptions et analyses dans le corpus PFC*, Thèse de doctorat, Paris Ouest-Nanterre-La Défense.
- Morin, Y. C. (2005). Liaison et enchaînement dans les vers aux XVI<sup>e</sup> et XVII<sup>e</sup> siècles, In : Jean-Michel Gouvard (éd), *De la langue au style*, Lyon: Presses Universitaires de Lyon, 299–318.
- Passy, P. (1889). *Le Français Parlé, morceaux choisis à l'usage des étrangers avec la prononciation figurée*, 2<sup>ème</sup> édition, Heilbronn : Henninger frères.
- Passy, P. (1899). *Les sons du français*, 5<sup>ème</sup> édition, Paris : Librairie Firmin-Didot.
- Straka, G. (1981). Sur la formation de la prononciation française d'aujourd'hui. *Travaux de linguistique et de littérature*, 19, 1, 161–248.
- 近藤野里. (2013). 「19世紀末フランス語の母音体系——Paul Passy (1889)によるフランス語記述を基に」, 『ふらんぼー』, 39号, 88–109.
- 近藤野里. (2015). 『17世紀末および18世紀初頭フランス語におけるリエゾンの分析——Milleran (1694)およびVauvelin (1713, 1715)の文献調査を基に』, 東京外国語大学, 博士論文.
- 近藤野里. (2020). 「フランス語教科書でのリエゾンとフランス語学習者のリエゾンの実現」, 『外国語教育研究』, 23号, 1–19.